

平成16年度 大学院工芸科学研究科博士後期課程 学位記授与式
学長告辞

ここに長年にわたる勉学の結果として博士の学位を取得された皆さんを迎え、授与式をとり行うことができましたことは私の非常な喜びとするところであります。

本日博士の学位を取得された30名の皆さんに対して、京都工芸繊維大学を代表して心から祝意を表します。また、長い間にわたって皆さんの勉学をささえられたご家族の方々に対しても深い敬意を表します。

京都工芸繊維大学は、昭和63年に工芸科学研究科博士後期課程を設置し、昨年11月までに、課程博士366名、論文博士133名の博士取得者を生み出し、多くの知的財産を着実に蓄積してまいりました。本日は、皆さんに、それぞれ課程博士第367号から第393号として、また、論文博士第134号から第136号として学位を授与させていただきましたが、皆さんの研究業績は、本学の新しい知的財産として付け加えさせていただくことになります。そして、皆さんの後からやってくる学生の研究のために、また、それぞれの学問分野の新たな展開のために、さらに、技術革新や新たな産業の創生の素材として利用されることになります。

皆さんの研究成果は、学問的にも、また、産業界への貢献という点においても、極めて価値が高いものであると認識しています。学位を取得された今日からは、プライドをもって、それぞれの能力をそれぞれの分野で生かしていただきたいと思います。その際、専門の分野の研究テーマを深く極めることに主眼をおいてきたこれまでのスタンスとは違って、広い視野と国際的視点をもつことを同時にここがけてください。

皆さんは、実社会において企業での製品やシステムの開発・営業に取り組む、または、創作活動に励む、あるいは、大学で研究を行うなど、様々な形で物を造り出し、世の中に広めていくという活動に携わることになります。このとき、皆さんが作り出すものが、これからの世界の文化のあり方に影響を及ぼしていくという事を常に考えて頂きたいと思います。その際、自分の国という小さな世界ではなく、一地球人として、国際的視点を持って頂きたいと思います。

20世紀は「国造り」の世紀であり、大半の国が、単一のアイデンティティを持った、文化的に同質な国家の建設を目指した時代でした。その結果、この地球上には、3000位の異なる文化を持った人種が、200たらずの「国」に住んでおり、ほぼその3分の1の国が紛争、または内乱状態にあるといわれています。20世紀の歴史が教えてくれた事は、ある文化集団を根絶、排除しようとする試みは、強い反発を誘発するということです。それとは対照的に、文化的アイデンティティを認めることは、永続的な緊張関係を解消するのに役立つということです。

ハンチントンの文明衝突論は皆さんも耳にされたことがあると思いますが、文化的多様性を如何に保つのかということは、今日の世界で、環境問題と並んで、大きな問題となっています。そして、グローバル化がこれらの問題の解決を難しくしています。フランスのミッテラン大統領の顧問をつとめ、欧州復興開発銀行

の初代の総裁をつとめたジャック・アタリ氏は、昨年の秋、京都で開催された「文化フォーラム」での講演で、グローバル化の時代における文化的多様性について4つの未来が考えられ、そのうち2つは大変危険なものであると指摘しています。

第1は、同化を求める戦いで、市場経済の普及により文化の独自性が失われ、すべてが画一化する中で、商品の多様化と絶え間ない改良が行われます。市場についての発展の規範や、欲望、野望が画一化されることにより、似通う文化をもつ人々が、貴重な資源をめぐる敵対関係になり、最終的には暴力につながるものです。

第2は、違いのための戦いで、グローバル化に反対する動きが、市場とそれを拒む者の対立、そして市場の勝者によって脅かされる文明間の対立として現れてくるものです。

第3は、混合を志向する方向性で、個々のレベルで文化的混合が進み、世界的規模の普遍的な社会がもたらされるというものです。文化は地球規模での混合をうみだし、もはや集団的構造をもつことはなく、個人のアイデンティティをなす一要素となります。その文化は、各個人の誕生とともに生まれ、死とともに死ぬ、集合体の一要素となります。

第4は、多様性を目指す方向性です。政治的にも経済的にもグローバル化が成功した中で、多数の文化が並立する未来です。それぞれの文化や国家は、移民のものであると同時に定住民のものであり、また開かれていると同時に閉ざされており、地理的多様性を保ちながら多くの文化が併存しているというものです。

これら4つの可能性のうち、どのような未来がもたらされるのかということは、これからの文化の担い手である皆さんの活動に拠っているのです。第1と第2の未来は暴力や争いの絶えない世界で、このような未来が訪れないように努力することが求められています。また、第3の未来のように文化的多様性が混合され個人の属性となるか、第4の未来のように地理的多様性と集団的構造が保たれるかは、個人個人が文化をどのように捉え、担っていくかによるのです。

ジャック・アタリ氏が言うように、いかなる文化も過去を守ることができなければ自らを維持することはできないのです。また、過去を守るだけは生き残ることはできません。外部の影響や外からもたらされるものを常に受け入れるようにしておかなければ生き残れません。日本でも、伝統文化・技術・産業の保存の問題や文化遺産の保存の問題が取り上げられており、皆さんの中にも、本学でこれに関係する専門知識に接した方もおられることと思います。また、日本でも移民や外国人労働者の数が増加してきており、異文化との交流も日常的になりつつあります。文化の多様性をどのように考えるのかということは、国際化の時代に生きる一人一人にとって大切なことであります。そして、一人一人が文化をどのように捉え、どのように担っていくのかということが、これからの世界の状況を決めていきます。

本学は、昨年11月、大学の理念を制定し、知と美と技を探究する教育・研究によって、国際社会における学術文化の交流に貢献することを目標に掲げました。今日、本学の博士の学位を取得された皆さんには、この本学の理念を理解し、人類愛に根ざした広い学識を深め、地球人として国際的舞台上で活躍していただくことを期待します。

皆さんは、明日からまた新たな挑戦を始められることとなりますが、皆さんの活動が世界の人々の幸福に大きく貢献することを祈って、私の告辞といたします。博士の学位取得、まことにめでとうございます。

平成 17 年 3 月 25 日
京都工芸繊維大学長
江島義道